

東京バッハ合唱団 月報

[第576号] 2010年6月

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101 郵便振替：00190-3-47604
Tel：03-3290-5731 Fax：03-3290-5732
mail: bachchortokyo@aol.com http://www2.tky3web.ne.jp/~bach/chor/

BACH-CHOR, TOKYO
Monthly Newsletter No.576
June 2010

5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo

Workshop & Concert 「バッハの教会カンタータを日本語で歌う」

“全員が歌う人 4声体のコラールを体験してみよう”

大村 健二

5月16日、荻窪音楽祭の一環として、東京バッハ合唱団の特別演奏会が開催されました。去年にひきつづき、荻窪教会(日本キリスト教団)からのお誘いによるものです。

地域に開かれた催しという特質をいかし、今回は、“コラール”の合唱体験を織りまぜながら、一般的にはまだなじみのうすい、バッハの“教会カンタータ”というジャンルに親しんでいただくという趣旨で、演奏の前に、簡単なワークショップを試みました。

第1部 ワークショップ

第2部 コンサート

- ・カンタータ第17番《感謝ささげ ほめ歌う者に》
- ・カンタータ第4番《キリスト 死につなわれしが》
(オルガン：金澤亜希子、指揮：大村恵美子)

定員90名の会場(礼拝堂)に、100名以上のお客様を迎え、そのうち27名がワークショップに参加していただきました(S:9名、A:8名、T:5名、B:5名)。さいわい好評だったようです。

コンサートでは、ご覧のとおり、来たる6月6日の定期演奏会の演目からの2曲をとりあげました。本来はソリストが担当すべき楽曲を、レチタティーヴォは朗読(荻窪教会員)により、アリアはコーラスの声部斉唱によってご披露しましたが、これも、教会を会場にした場合の、ありうべき演奏形態としての提案を兼ねたものです。

*

第1部の進行役を勤めさせていただきましたが、限られた時間のなか、意図した内容をじゅうぶんにお伝えできませんでした。用意した趣旨説明の原稿を転載し、当日のワークショップの不備を補わせていただきます。

<ワークショップの前に>

企画のねらい

本日の企画のねらいは、“コラール”に焦点を当てて、バッハの教会カンタータに親しんでもらおうということです。

つまり、当時のバッハの聴衆(18世紀のライプツィヒの市民たち)具体的にはバッハの“教会カンタータ”が実際に演奏された場に居合わせた信徒の方々が、その場(聖トーマス教会やニコライ教会の日曜礼拝。その堅い、

木のベンチ椅子)で感じたにちがいない気分や想い、感動、安心感、共感などが、どんなものだったのかを想像してみようということにあります。そのことによって、バッハ自身が伝えなかった音楽のメッセージを、直に受け取ってみることができるかも知れません。

全員が歌う人・・・第1のテーゼ

皆さんのなかで、日曜の礼拝にお出になったり、教会での結婚式や告別式に参列されたことのある方はご存知でしょうが、キリスト教会では、カトリックであれ、プロテスタントであれ、会衆が讃美歌(聖歌)を歌います。聖歌隊だけが歌う場合もありますが、全員が歌う場合もあります。音痴だろうが何だろうが歌います。なぜ歌えるかということ、旋律や歌詞が覚えやすいこと、そして何十遍でも繰り返して歌っていること、この2つにつきまします。けっして音楽的才能や教養があって歌えているわけではないのです。

本日は、前半のワークショップの機会を利用して、お客様全員に、18世紀のライプツィヒ市民になっていただき、バッハが指揮をしている教会の礼拝に参列していただきます。ここでは、全員が歌います。なぜ歌えるかということ、歌いやすいこと、何度も繰り返すこと、先と同じです。300年の時間も、言葉の違いも問題になりません。なぜかということ、外国語ではないからです。本日のテーゼは「全員が歌う人」です。

いきなり、嫌味をひとつ

教会に通っている方にお聞きします。教会でのお葬式や結婚式では、クリスチャンではない方々も大勢参列していますので、そのなかで讃美歌なり聖歌なりを歌う場面になると、微妙な心理が働いていないでしょうか？私は歌える人です、どうだ！とまでは思わないでしょうが、やや誇らしいような...。あるいは逆に、日本人のなかで、やはり浮いてるなあ、という複雑な感情。

教会にあまりご縁のない方々にお聞きします。感じませんか？なんか、あいつ得意になってない？っていう雰囲気...。あるいは、歌えていいな、というちょっとした羨望。

バッハにかぎらず、あちらの声楽曲を、原語で歌いま

くっていらっしゃる方にお聞きします。上と同じ心理のこと。べつに、何も、という方は別にして、ここに、西洋の精神や文化に出会ったときの、われわれ日本人の一般的な心理状態がありそうです。

今日は、歌をどこに向かって歌っているか、という本質を意識することによって、この微妙な心理をめぐり去りましょう。そのためにも、これからのワークショップでは、コラールの定旋律はみなさん全員でお歌いいただけるとうれしいです。誰もが使いこなせる日本語で歌うということも、本質は同じです。本日のワークショップもコンサートも、このことの意識を、心のどこか片隅に置いて、最後までお楽しみいただければ幸いです。

一瞬で空気が変わった

バッハのコラールといえば、まず「主よ、人の望みの喜びよ」を思い浮べる方が多いのではないのでしょうか。例の有名な曲です。

うちの合唱団でも何度も演奏しているのですが、定期演奏会でこの曲をとりあげるたびに、必ず感じるがあります。この曲、正確に言えば、カンタータ第147番「心と口と行いと生き様もて Herz und Mund und Tat und Leben」、われわれの歌う訳では、《心と日々のわざもて》ですが、この大きな作品のなかに前後2回登場するコラール「イエスよ、わが魂の喜びよ Jesu, meiner Seelen Wonne」のことです。冒頭合唱ももちろんご存知の方は多いのですが、それからレチタティーヴォやアリアがつづいて、6曲目あたりに、ようやく、あの「ウたら、たらら、たらら」というオーボエと弦の前奏が始まると、ホール全体が、ワッと一瞬、静かにどよめき、空気が急にホワッとやさしくなるのです。それまでの空気が、いうならば、客席と舞台が、わたし聞く人、わたし歌う人、という立場の違いで、ぎこちなく対峙していたものが、その壁が突然サッと消えて、1989年のベルリンの、あの

東側の人々と西側の人々が抱き合っただけになった瞬間がありましたよね、あれです、あのようになつて、明るく、はんなりとなるんです。お客もうれしいでしょうが、われわれもうれしいです。

何が起こったのかといえば、聴衆の方々の、ほぼ全員が、その旋律になじんでいて、心のなかで「ウたら、たらら、たらら」を始めているのです。すなわち「全員が歌う人」になった瞬間です。

W/S参加者と見学者

これから試してみようとするのは、この「全員が歌う人」の空気を、これからの数十分で醸成することです。樽で熟成させる余裕がありませんので、即席ですが、みなさんの想像力で何十倍にも豊かにしていただけるよう、ご協力ください。

以上でほぼご了解いただけたと思いますが、したがって、ワークショップの参加者、本日の場合、前列にお集まりいただいています、3列目あたりまででしょうか、と見学なさる方、との間に境はありません。全員に楽譜もいきわたっているはずですから、どうぞ、「全員が歌う人」になってください。強いていえば、前の方々には、皆さんを代表して、恥をかいていただく、という役割を担っていただきつつ、コーラスする喜びというご褒美も味わっていただきましょう。

後半の演奏会では、よろしければ、それぞれのカンタータの最終コラールの場面では、われわれと一緒に歌っていただけたらうれしいと思っています。

コラールとは

バッハの教会カンタータの土台には、当時の民衆に親しまれた讃美歌が置かれています。この讃美歌を「コラール」と呼びます。ドイツ人は、今も昔も、音楽が大好きですが、このワークショップに関連して言えば、宗教改革の時期(16世紀)から30年戦争の混乱期(17世紀)を経てバッハの時代(18世紀)にいたる間(もちろんそれ以前も、それ以降今日にいたるも)、ドイツの民衆は、喜びにつけ、悲しみにつけ、教会で、家庭で、職場で、あるいは腰掛けて、あるいは歩きながら、働きながら、何百種類というコラールを歌い続けています。

これから覚えてみようという3曲のコラール(BWV17/7、BWV4/8、BWV52/6)は、たまたま、すべて宗教改革のさなか(バッハから200年前)のコラールですが、バッハはそのほかにも、有名なパウル・ゲルハルトなど、バッハの1世紀前のコラールも、多くをカンタータのなかに採用し、わずかながら彼の同時代のコラールも取りいれています。同時にあつかってみると、時代の色合いが歴然としますが、比較は別の機会にしましょう。

カンタータの中でのコラールの位置

バッハはこのコラールを、カンタータのなかに様々な

お・た・よ・り

花井 鉄弥 様(後援会員)

荻窪教会でのワークショップとコンサートに参加させていただきました。

カンタータとコラールについての貴重なお話をいただき、作曲するバッハの心のありようについて、琴線に触れるような感銘を覚えました。私のつねに疑問とする、ドイツ土着のコラールが、それを聴き、歌う私どもに、何故、昔から身近にあるような懐かしい、温かい感情を与えてくれるのか、その一端がわかったような気もします。

ワークショップを終え、コンサートでは、コラールに入る前に、皆様に温かく迎えられて列に並びました。いつも後ろ姿ばかりの先生が、すぐ前に、そして皆様と一緒に声を出す、夢のような機会でした。第4番コラールのアレリヤを終えたとき、感動のあまり呆然としてしまいました。

6月6日は、客席にて、今日の体験を胸に、新たな感慨にひたることができると思います。(…)

工夫をこらして織り込んでいます。あるいは素朴な讚美歌の姿そのままでも用いました。バッハの音楽は、きわめて芸術性の高いものです。このことに異論はないでしょう。ひごろ慣れ親しんだコラールの旋律と歌詞が、ゴシック空間の荘厳な響きのなかで、神への祈りとして、感謝として、あるいは悔い改めとして、芸術作品の高みへと昇華されていくわけです。個人の日常の思いと情感が、コラールという媒体によって、至高の高みへ運ばれる。バッハが、カンタータ作品の大部分において、当時の民衆にプレゼントしたのは、こんな豊かさです。

日本語

先ずこのコラールを、バッハ時代の民衆と同じほど身近なものにしてしまいましょう。これからの30分ほどで、どれほど身近になるか、とお思いでしょうが、ここに「日本語」の存在理由があります。なぜ、バッハを日本語で歌うのか？ 答えは簡単です。バッハは自分の母語(国のことば、第1言語)で歌うことを前提にカンタータを作ったからです。ですから、われわれがこれを再表現しようとすれば、その1つの方法に、われわれの母語で歌う、ということがあっていいわけです。それどころか、バッハの聴衆と同じ感動・共感をえようとすれば、ここに言語の壁は、あってはならないのです。

会堂の琴線に触れる・・・第2のテーゼ

声楽家はもちろん、どこの合唱団でも、声を出すときに、会堂の天井の空間を意識するように心がけます。われわれの場合、歌うのに必死ですので、たいていはこれを忘れます。バッハ合唱団はこれが苦手ですが、本日のみなさんにはお勧めします。音程は高くなる、音質は明るくなる、合わせたときの響きが美しくなる、といった具体的な事柄の解決策にほかならないのですが、実は、コーラスに限らず、オルガンでもオーケストラでも、音楽は、人や楽器が歌ったり、鳴ったりするのではなくて、この会堂の空気が共鳴してはじめて音楽になるわけです。

たとえば、バッハは実際に歌いながら楽譜を書いています。声や楽器がどんどん重なっていくときに、その総合的な響きを、ゴシック建築の聖堂の高みの空間に漂わせて、想像しています。そうに違いありません。自筆のスコアにそう書いてあるような気がします。バッハは、多くの曲の総譜に、Soli Deo Gloria(神にのみ栄光)、あるいは Jesu juva(イエスよ、助けたまえ)と書き込みました。音が向かっていく先を示しています。

そして最終的には、ホール全体で共鳴した空気の波が、お聞きになっていらっしゃるみなさんの耳を通して心に達し、そこで共鳴して音楽の完成となります。歌う人、聞くひと、全員で音楽をつくりあげる、このことを忘れないでいただきたいと思います。

心の琴線に触れる、といいますが、会堂の天井から垂直にたらされた、会堂の琴線に触れる音楽が奏でられた

今後の行事予定

- ▶ 6月6日(日)...第104回定期演奏会
 - ▶ 6月7日(月)...新規練習開始(18:30~、目白聖公会)
 - ▶ 6月12日(土)... " (15:30~、世田谷中央教会)
 - ・《口短調ミサ曲》譜読み再開 106定演(2011年11月)
 - ・BWV111、BWV68、BWV147、BWV230 次回105定演(*)
 - ▶ 7月5日(月)...創立48周年記念懇親会(18:30~、目白)
 - ▶ 7月10日(土)...2010年度団員総会(15:30~、世田谷)
 - ▶ 8月7(土)、14(土)、21(土)、28(土)(13:30~17:30)
 - ・《口短調ミサ曲》夏季集中練習(各4時間、世田谷)
 - ▶ 12月...クリスマス特別演奏会(細目未定)
- 2011年
- ▶ 1月8日または9日...第105回定期演奏会(*)

(*)第105回定期演奏会の曲目について

- ・カンタータ第111番《み心は つねに成し遂げらる》
- ・カンタータ第68番《み神はこの世を かく愛したまえり》
- ・カンタータ第147番《心と 日々のわざもて》
- ・モテット《頌めよ主を 世の民こぞりて》BWV230
(2011年1月8日または9日、石橋メモリアルホール)

この定期演奏会(第105回)については、昨年7月の創立記念懇親会にご訪問くださった韓国・延世大学教会聖歌隊のキム・ヘオク先生(指揮者・同大学教授)らのご希望もあり、合同演奏会の可能性を模索していましたが、先方の都合がつかず、先送りとさせていただきます。

時期と会場の設定については、すでに申請を進めていますので、これを動かさず、通常どおりの、われわれ単独の公演とすることとします。

曲目は、今後の、50周年に向けての新たな参加者に配慮し、カンタータの名品中の名品を揃えてみました。ご期待ください。

ら成功です。これからコラールを歌ってみますが、天井のこと、お忘れなく。

<ワークショップの後で>

教会カンタータとは

ひきつづき、コンサートをを行いますので、簡単な解説をさせていただきます。

教会カンタータは、当時の礼拝の中で、合唱・独唱・器楽合奏などをともなって演奏された声楽曲で、歌詞はその日の説教の主題に関連して選ばれました。

たとえば、本日演奏するカンタータ第17番は、教会暦で「三位一体節後第14日曜日」の礼拝のために作曲された作品(初演1726年9月22日)で、この日曜日には「ルカによる福音書」17章の11-19節が朗読されます。イエスが癒した10人のライ病人のうち、感謝をささげにもどってきたのは、ひとりのサマリアびとだけだった、という内容です。バッハは、前の週あたりに、牧師と打ち合わせて、説教を補強する内容のカンタータを準備し

ました。急いで総譜を仕上げ、パート譜を書き、トーマス学校の生徒を仕込み、楽器と合わせ、礼拝に駆け込みます。ある時期、これが毎週つづいていたのですから、生徒の合唱団もたいへんだったでしょう。

今日のコンサートの特徴

プログラムをご覧ください。表紙の中ごろに「カンタータ第17番《感謝ささげ ほめ歌う者に》」というタイトルがあります。その下に 合唱、レチタティーヴォ(A朗読) アリア(S斉唱)……とありますが、これがこの曲の楽曲構成です。「レチタティーヴォ」とつぎの「アリア」は、オペラなどでも登場しますが、「語り」と「歌い」のセットと思ってください。「語り」といっても、その台詞(元のドイツ語)を、作曲家バッハが朗々と読み上げると、おのずとリズムとメロディがつくのですが、それが一つの短い音楽の楽譜になっています。実際の演奏会では、この「レチタティーヴォ」と「アリア」は、ソリストが担当します。かなり高度な音楽なので、普通は、訓練を受けた専門家が歌います。

小規模なカンタータ演奏のモデル提示

では、本日はどうするかというと、「レチタティーヴォ」部分は、この荻窪教会の教会員の方に朗読していただくことにしました。「アリア」部分は、合唱団の団員が涙ぐましい努力をして、今日のために備えました。つぎのカンタータ第4番には「レチタティーヴォ」はありませんが、「アリア」はあります。二重唱とかコラール編曲とかと書いてあるのがそれです。ここも今日は、合唱団が歌います。きょうは、寛大な皆さんのお許しを得て、なにしろ、全員が歌う人なので、大胆にも、合唱団の各パートの斉唱で歌わせていただきます。

楽器に関しても同様です。本来は管弦楽がつきます。17番では、2本のオーボエ、ファゴット、弦楽四重奏とバス、オルガンという編成。4番では管楽器はなしですが、弦楽四重奏とバス、オルガンが伴奏をします。きょうは、そのオーケストラをオルガニストが一人で担います。いろんな声部から、大事な旋律線や重要な和音をピックアップして、とにかく両手の指と両足とでやりくりして下さるはずで。

オリジナルの編成に対して、本日は略式の演奏ですが、これでもバッハは、草葉の陰で(トーマス教会の祭壇の足元で)喜んでくれていると確信します。オリジナルでなければならぬとして、敬して、たてまつって、触らないよりは、その場の“ありもの”でだけでも演奏して、大いに愉しむ。どちらがバッハの音楽にふさわしいでしょうか? バッハは専門家の占有物ではありません。

教会などでは、こんな形のカンタータ演奏がどんどんなされたら良いと思います。できたら、音色を補強する楽器が1、2本あったら、さらにすばらしいかな?

(2010/05/16、荻窪教会)

柳元 宏史

連載：全部おすすめ 50 曲選!! <その 25>

カンタータ第 99 番 (神の御業こそ ことごと善けれ)

岡山の春はすがすがしい。蕃山町教会は、日本三大名園の一つ「後樂園」にほど近い。気候も良くなり、朝の光に誘われて後樂園の外周を散歩すると、新緑のみずみずしさに、溢れる生命の力を感じる。このような春のすがすがしさと、生命ののびやかさを感じることができるのが、今回ご紹介するカンタータ第 99 番である。

「神がどこまでも愛し、なにがあってもあなたを支えるから大丈夫。だから、思い悩まなくてもいい」というメッセージが全体の基調である。そのどっしりとした安心感に支えられ、全体として整った曲の構成となっている。

この曲、バッハがライプツィヒに着任して間もない頃のもので、BMW 番号の前後の第 98 番、100 番の同名のカンタータとあわせて、「バッハの威力を集中的に証しするもの」(大村恵美子)として必聴であろう。

まず、明るくのびやかで、生命の躍動感溢れる 4 声のコラール合唱に心が弾む。神の御業こそ ことごと善けれ という歌詞は、最後(第 6 曲)のコラールの冒頭にも繰り返される。これは、手放しにわたしたちの人生がすべて善い、といているのではない。苦しく、辛く、悲しみに枕を涙で濡らす時もある。それでも、神は人間の理解を超える手段で、日々の必要を満たし、わが子のように大切に導いてくださる。そこにすべてを委ねればいい。このキリスト教信仰のモチーフが、曲全体を支配している。

印象的なのは、テノールのアリア(第 3 曲)で、ひるむな という歌詞が繰り返されているところである。こうも ひるむな と置み掛けられると、自分が望むような境遇にない場合でも、これもまた神が与えたものかもしれないと受け止めることができ、なんだか勇気が湧いてくる。第 5 曲、二重唱(ソプラノ/アルト)には、重荷 耐えずして 投げ出す者は 喜びを迎えること あたわず とある。

私はここに、これを歌う東京バッハ合唱団を思わずにはおれない。合唱団の名のとおりバッハのみに軸足を定め、日本語での演奏にこだわり続けてきた。様々な局面に遭遇しながらも、灯心は消されることなく 50 年に向う歴史を刻み続けてきた。神の御業こそ ことごと善けれ 悩みにも死にも われは揺るがじ (第 6 曲、コラール。まことにそのとおりである。

(やなぎもと・ひろし、団友・蕃山町教会伝道師)

CD バッハ・カンタータ 50 曲選 [第 12 巻] に収録。S 光野孝子、A 佐々木まり子、T 佐々木正利、B 宇佐美桂一。橋本眞行指揮・東京バッハ合唱団 / 東京カンタータ室内管弦楽団。2004 年録音 (第 95 回定期演奏会、石橋メモリアルホール) 楽譜:「50 曲選」No. 30